

電との間でやりとりがあり、15日4時17分には、その点について、首相と清水社長との会談が行われ、清水社長が撤収を否定した。

5時半頃には、政府と東電とで事故対策統合本部を設置することが合意され、東電の事故対策室に官邸側も臨席するようになった。

また、その直後、首相が東電本店を訪れ、東電社員に対し、撤退は許されないと述べたことがあったが、その直後の6時14分頃に4号機の水素爆発があり、官邸側も、一部の人達の退避を認めることとなった。爆発は、2号機によるものと心配されたが、それは4号機によるものと判明したものの、9時頃には、2号機のドライウエル (D/W) の圧力が0.73MPaから0.15MPaに急落し、サプレッションチェンバ (S/C) の圧力も0となっていた (0となったのは、計測器の誤作動であることがその後明らかとなったが、その数値を見た当時は、サプレッションチェンバ (S/C) が破損したものと疑われていた)。

結局、7時頃から11時25分まで、監視・応急復旧作業に最低限必要な約70人を残して大部分の650人の作業員が福島第二原発に避難した。そのため、福島第一原発での各原子炉の監視や、現地作業に支障が生じていた。

9時頃の正門付近では、放射線量が11930 μ Sv/h、10時22分頃の3号機付近では400mSv/h、4号機付近でも100mSv/hとなっていた。

11時、20km～30kmの圏内の住民に対して、屋内待避が指示された。

(2) 15日における各原子炉の事象

ア 1号機

1号機については、終日、前日からの消防自動車による海水注入が継続された。

15日の1号機の原子炉水位は前日同様TAF-1700mmのまま継続し、原子炉圧力容器 (RPV) の圧力0.223MPa～0.0MPa、ドライウエル (D/W) の圧力は検出器不調で測定不能であった。

イ 2号機

15日0時頃、2号機についてベント操作が開始されていた。

2号機についても、消防自動車による海水注入が続けられた。

2時45分、2号機のCAMS測定結果11%と社内テレビ会議で発言していた。

15日の2号機の原子炉水位は3時頃ダウンスケール (D/S)、6時頃-2400mm、11時頃以降水位上昇し-1400mmで推移する。原子炉圧力容器 (RPV) の圧力は、0時5分の0.653MPaから1時2分頃には2.520MPaを示し、1時20分頃には再び0.653MPaに下がり、その後ドライウエル (D/W) 圧力計が示す0.730MPaと同じ圧力に推移していった。それに対し、前日深夜からの0.72MPa～0.75MPaと続いていたドライウエル (D/W) の圧力は、11時25分頃には0.155MPaに減圧し、その後13時頃には0.415MPaに戻るが、その後0.12MPaに減圧していった。前日深夜から0.4MPa～0.32MPaと続いていたサプレッションチェンバ (S/C) の圧力は、6時頃突然0となり、その後もその状態が続いた。ベントは行われていなかったから、格納容器からの直接漏出が疑われた。